

点字の普及について

日本点字委員会委員 藤野 克己
ふじの かつよし

私が日本点字委員会の存在を知ったのは、『日本点字表記法 現代語篇』を手にしたときですから、30年以上前のことです。高校生のときに本間一夫先生が書かれた「点訳のしおり」で点字に入門し、日本赤十字社神奈川県支部の点訳ボランティアとして活動した後、昭和40年にオープンした神奈川県点字図書館に職員として勤務し、その間「点訳」という立場からしか点字を見てこなかったのも、この資料を見たときには、「なんてあいまいな表現なんだろう」というのが正直な感想でした。それぞれが長い歴史の中で培ってきた点字表記を、同じ土俵に乗って一つの体系にまとめるという当時の関係者の苦勞など知る由もなかったのも、そのような感想を持ったのだと思います。

その後、東京で開かれた点字図書館・点字出版所の職員を対象とした点字研修会などで日点委の中心の方々を知り、点字に対する熱意に圧倒されながらも強く惹かれていきました。そして、オブザーバーとして日点委総会に出席させていただくようになり、事務局員、委員と次第に関わりを深くしながら現在に至っています。

私などは、ただ点字が好きだけの人間で、視覚障害者の教育、福祉の専門家でもなく、国語の専門知識も持ち合わせていないのですが、だからこそ、日点委で議論され決定される点字表記のルールが一般の方々に理解していただけるかどうかのリトマス試験紙的な役割を持っていると自認してここまでやってきました。

さて、日点委の会則を見ると、第2条〔目的〕に「……視覚障害関係各界の総意に基づき、日本における点字表記法の唯一の決定機関として、広く各界の研究成果を積み上げ、未来への展望のもとに権威ある決定を行い、その普及・徹底を図ることを目的とする。」とあり、第3条〔事業〕では、(1)点字表記法の決定と修正 (2)点字表記法の普及と徹底……とあります。

私は日頃、視覚障害者情報提供施設（点字図書館）の現場から点字によるさまざまな情報を発信し、また、中途視覚障害者の点字学習をサポートし、さらに点訳ボランティアの方々に点訳の規則を伝え、最近では、小学校や中学校の児童・生徒に点字の普及と点字を使う人たちを身近に知ってもらうための工夫をするなど、点字をさまざまな角度から考える機会があります。そこで、この稿では、「点字の普及」にスポッ

トを当てて、考えてみたいと思います。

点字使用者の状況

5年ごとに厚生労働省が行う身体障害者実態調査によると、2001年6月1日現在の日本の視覚障害者は30万1千人で、そのうち「点字ができる」と答えた人は3万2千人（10.6%）という結果が出ています。前回の数値よりわずかに高いものの、点字の普及率の低さに多くの点字関係者がショックを受けたことと思います。しかし、調査報告を詳しく読むと、10.6%という数字は総数で見た場合で、等級別の内訳を見ると、1級では10万5千人中2万2千人（21.0%）、2級では7万4千人中9千人（12.2%）となっています。また、私が別に入手した「年齢階級別にみた点字修得の状況」では、20～29歳では7千人中1千人（14.3%）、30～39歳では8千人中2千人（25.0%）、40～49歳では1万6千人中5千人（31.3%）、50～59歳では4万7千人中1万2千人（25.5%）となっていて、60～69歳になると6万6千人中4千人（6.1%）と極端に低くなっています。このことから、私たち点字に関わる者は、点字の普及率が10.6%と一口に言うてしまうのではなく、重度の人やいわゆる「現役」の人の点字の普及率をきちんと見据える必要があると思います。また、調査では「点字ができない」人を、「点字必要」と「点字必要なし」、それに「回答なし」の三つに分けています。そこで少々乱暴ながら、「点字必要なし」を差し引いた人数で普及率を計算すると、1・2級では6万7千人中3万1千人（46.3%）、20～59歳では3万7千人中2万人（54.1%）という高い数値が出ます。「点字必要なし」と答えた人が本当に生活上点字を必要としないかは正確には分かりませんが、重度の視覚障害者や現役年齢の視覚障害者のうち点字を必要とする人の点字普及率はかなり高いと言えると思います。

視覚障害者への普及

一方、点字を必要としながら点字ができない人がいることも事実で、これらの人への点字の普及は極めて大切なことだと思います。1・2級では約1万3千人の人が、20～59歳では7千人の人が「点字が必要」だが「点字ができない」と答えています。これらの人へのサポートが全国の盲学校やリハビリテーション施設、視覚障害者情報提供施設で行われていますが、現状では指導方法や使用テキストがまちまちです。特に中途視覚障害者への点字指導は、文字の回復と同時にリハビリテーションの入り口として重要な意味があると思われしますので、すでに一部で行われていますが、指導法

の全国レベルでの研究と普及によって、効率のよい指導を行う必要があると思います。また、従来からの標準サイズだけでなく、Lサイズの点字による指導や情報提供なども点字の普及に役立つものと思われまます。

すでに点字を使っている視覚障害者へは、点字表記法の普及が求められています。

「点字表記はむずかしい。」「読点・中点が点字を読みにくくしている。」「日点委は表記をやたらに変えている。」などの声はよく聞かれます。『日本点字表記法 2001年版』の編集に関わっているときに感じたのですが、「表記法」に準拠する形で『点訳のてびき』があるように、「表記法」に準拠した視覚障害者が点字を書く際に必要な表記の資料があってもいいのではないかと思います。そうすれば、「表記法」はもつとルールブックとして文法的に整合性のある資料になると思われまます。次の改訂の際にはぜひ考えていただきたいことです。

点訳者への普及

『改訂日本点字表記法』を受けて、点訳という観点から編集した『点訳のてびき 入門編』が発行されたのが1981年でした。これによって、全国の点字図書館共通の点訳のテキストが完成し、点訳図書館の標準化に大きく役立っています。

この『点訳のてびき』の完成には、先頃お亡くなりになった本間一夫先生の存在を忘れることができません。

1980年7月、現在私が勤務している視覚障害者生活情報センターぎふ(当時は「愛盲館」)で全国点字図書館協議会の「点字指導法確立委員会」第1回委員会が開かれ、本間先生も出席されました。この委員会では、全国の点字図書館が共通の点訳指導を行うには共通の点訳テキストを作る必要があるとの認識のもとに議論がされました。当時は「表記法」で新たに上げられた読点・中点を点訳でも使うかどうか、「おかあさん」「おねえさん」「大きい」など、それまで長音で表していたア列・エ列及びオ列の長音をどうするかが大きな意見の分かれ目でした。これからの点訳には原文にある読点や中点を使うべき、「おかあさん」「おねえさん」「大きい」は長音を使わずに現代仮名遣い通りに書くべきという多数の意見に対して、本間先生は、読点や中点は使わない方が読みやすい、「おかあさん」「おねえさん」は長音で表すという今までの表記を主張され、真っ向から対立してしまいました。この二つの点で委員の意見が一致しなければ、全国共通のテキストはできないわけで、会議の成果が得られないまま座が重苦しい雰囲気になったとき、本間先生が「皆さんが賛成するなら、私は特に

反対しません。」とおっしゃいました。この一言で話合いが一気に進み、8カ月たらずの短い期間で『点訳のてびき 入門編』が完成し、全国の点字図書館で使われるようになりました。あのおとき本間先生の一言がなかったらと考えると、本間先生の懐の深さに改めて感謝せずにはられません。

『点訳のてびき』は、その後「表記法」の改訂に合わせて版を重ね、現在は『点訳のてびき 第3版』として毎年約1万冊が全国で使われています。

点訳者が増えるにしたがって、「語例集」の要望が高まってきました。「表記法」も「てびき」も表記に幅があるため、一つの言葉に一つの表記を求める方々にとって簡便な「虎の巻」が必要とされているためです。『点字表記辞典』はそうした要求に応えるもので、全国に普及しています。「語例集を日点委か全視情協で作ってほしい」という質問を受けることがよくあります。そのたびに私はこう答えています。「日点委や全視情協でも語例集を作ることはできます。でも、そこに出てくる語例には、たぶん皆さんが望むような微妙な言葉は入っていません。」語例集が役に立つのは、一つの施設や団体が作るからだと思います。

点字の普及・啓発

最近、小学校の国語の時間や「総合的な学習」などで、点字や視覚障害者への関心が高まっています。全国の視覚障害者情報提供施設には、地域の小・中学校から依頼が寄せられ、対応に苦慮しているところもありますが、これをチャンスととらえて、点字の読み方・書き方の基礎を普及し、同時に、点字を使う人びとのことを知っていただくための取り組みをすることは大きな意義があると思います。そこで、全視情協では、小・中学校の児童・生徒や先生に学習していただくためのビデオ「指で読む文字 ― 初めての点字」を製作しています。これは、点字の歴史、組み立て、読み方、書き方、視覚障害者情報提供施設の様子などを内容とし、点字とその周辺の基礎的なことを知っていただく内容になっています。このビデオには、教室に貼ることができるような大判の点字一覧表（凸面・凹面）を付けてあります。

また、『初めての点字』や『初めてのガイド』などを発行し、学校教育の中で点字や点字を使う人びとについて正しい認識を持ってもらうための努力を続けています。

日点委の事業が点字表記の決定に留まらず、点字に関するさまざまな情報を発信して広い意味で点字の普及について取り組んでいくことが必要だと思います。

特集 本間一夫・永井昌彦 ― 人と業績

日点委の先達 本間・永井両先生からの贈り物

きづか やすひろ
木塚 泰弘 (日本点字委員会会長)

2003年は、日本点字委員会にとって極めて悲しく、さびしい年であった。1月に、会友の永井昌彦先生を喪い、8月には、顧問の本間一夫先生を喪った。二人とも、日本点字委員会発足以前から、点字の表記法や普及に大きな貢献をなされた方であった。

私が初めて本間先生にお会いしたのは、1955(昭和30)年の9月であった。中途失明後、下関から上京して、附属盲学校の高等部1年生に入学した年であった。「全国点字教科書問題改善促進協議会」が発足してまもなく、先輩の原田逸夫さんにガイドしてもらい、日本点字図書館に本間先生を訪ねた。外国の点字教科書の状況を知りたかったからである。本間先生は、「教科書のことはいくぶん知らないけれども、点字の学習参考書や専門書はかなり出版されているよ」と、優しく答えてくださった。

その後、どこかでご一緒する度に先生の方から声をかけてくださって、恐縮もし、うれしくも感じていた。附属盲の生徒や早稲田の学生時代、度々日点を訪ね、その頃まだ少なかった職員の方とも親しくなり、鷹取山にハイキングに誘われたりもした。今、その鷹取山の中腹に開発された住宅に住んでいるが、山頂の公園と嶺のハイキングコースだけが残っており、その頃の事を懐かしく思い出している。1963(昭和38)年には、本間ご夫妻に仲人をお願いした。

それから40年、公私共にお世話になっただけに悲しい知らせであった。せめて、楽しみにしておられた2カ月後の米寿を迎えてもらいたかったと、還暦を3カ月前に亡くなった父の無念さと重ねて思った。

永井先生と初めてお会いしたのは、1964(昭和39)年8月、京都府立盲学校で開催された日本点字研究会と全日盲研英語部会の時であった。5月に息子が生まれ、祖母となった母を、長良川と京都の観光に誘って出かけた。多少気楽な気持ちで、初めて参加した日本点字研究会と全日盲研の英語部会で、永井先生の理路整然とした発表を聴き、感動した。永井先生はひとときわ輝いていた。その後、英語教師の先輩として励ま

しを受けるとともに、日本点字研究会には毎年出席した。

日本点字研究会は、会長の鳥居篤治郎先生の「読みよく、書きよく、わかりよく」をモットーに、日本語の語法を重視して、『点字文法』を1959(昭和34)年7月に、ルイ・ブライユの生誕150周年を記念して出版していた。その語法的裏づけをされたのは、永井先生であった。鳥居先生に頼まれて、関東から、阿佐博先生と共に『点字文法(点字国語表記法)』の改定のための編集委員会に度々出かけ、永井先生と親しく熱心に意見を交換したことを、若い日の思い出として鮮やかに思い出すことができる。

あの頃から39年間、点字や教育の意見交換をしてきていただけない、奥様から「最後は耳も遠くなり、京都ライトハウスの工事の騒音も気にならずに、安らかに眠れたと思います」と、お聞きした時、ほっとすると同時に、もっといろいろなことを話し合いたかったと、残念に思えてならなかった。

お二人とも親しくしていただいていただけに思い出は尽きないが、6人の方がそれぞれの思い出を書いておられるので、ここではお二人の点字表記法に対する思い入れについて取り上げてみたい。

1966(昭和41)年7月、鳥居先生からの依頼を受けて、若い私が根回しに飛び回り、日本点字研究会は解散し、全日盲研に点字部会ができるとともに、日盲社協の点字研究会からも委員を出し合って、日本点字委員会が発足した。最初の仕事であった『日本点字表記法(現代語篇)』1971年3月の発行は、統一のための難航の末、ある意味では妥協の産物でもあった。

本間先生は、昭和初期の完全表音式の盲学校用点字教科書で学び、1942(昭和17)年から『點譯の栞』で、点訳者の育成と点字図書普及に努めておられたので、表音派に徹しておられた。一方、日盲社協の点字研究会の会長で東京点字出版所の肥後基一所長は、「現代かなづかい」と「文節分かち書き」の原則に徹しておられた。日本点字研究会の流れを受けた永井先生の主張が、本則として採用される結果となった。

語の書き表し方では、助詞の「は」・「へ」を、「ワ」・「エ」と書くことには全会一致であった。問題となったのは、長音と連濁・連呼であった。結局、連濁・連呼は本則となり、ア列・イ列・エ列の長音は、それぞれ「ア」・「イ」・「エ」を添え、エ列の長音の漢語には、「イ」を添えることとなった。また、ウ列とオ列で「う」と書く長音は、長音符を用いることを本則とし、オ列長音の内、「お」と書くものは許容となった。和語のア列・イ列・エ列を長音符で書くことも許容となったが、エ列の漢語の長音は「イ」を添えることには許容はなかった。

分かち書きでは、文節分かち書きの原則を表面に打ち出し、助詞の「ようだ」だけが、例外として前を区切ることとなった。日点研以来の伝聞の「そうだ」や「ごとし」なども、永井先生が妥協して、結局続けることとなった。長い複合語は、適宜区切ることとなったが、漢字2字は区切り、漢字1字は和語(訓読み)でも続けることとなっている。文末の句点・疑問符・感嘆符は後ろを二マスあけ、読点は後ろを一マスあけて、共に用いることを本則としたが、これらを二マスあけにすることも許容となった。これは、永井先生の長年の主張が実現したことになる。

その後、句点や読点が点字教科書をはじめ公文書などに使用されるようになると、原本との一致を主張する点字図書館界でも強く主張されるようになったが、年配の読者からの反発は強く、点毎の読者欄でも、「躓き点、邪魔な点」、「くたばれ日点委」との主張が多く載るようになった。本間先生は少し譲りすぎたと感じられ、やはり古くからの習慣をそう簡単には変えられないと、許容を取りつづけられた。

その頃、本間先生は私に、「峠や岬が続くのはおかしいよ」と言われた。それをきっかけに、私は漢字数を基準にするのは間違っていると思った。そこで、自立語内部の切れ続きにおいては、「語の構成要素の自立的な意味」とそれらが「文節関係を内包していること」、それに「拍数」を基にし、漢語や和語の区別などはできるだけ避けようと思うようになった。今から考えると、「ようだ」はもちろん「ごとし」や伝聞の「そうだ」なども、助動詞として疑義を唱える学説も多くあるので、触読上の観点からも切ったままにしておけばよかったと感じている。

初代の鳥居会長が亡くなられ、それを継いだ2代目の肥後会長も亡くなられた後、本間先生が3代目の会長になられた。本間会長の下で、1980(昭和55)年2月、『改訂日本点字表記法』が発行された。

語の書き表し方では、前回の規則がより明確になった。連濁・連呼は明確に位置付けられ、オ列の長音の内、「お」と書く長音は、「オ」を添えることも明確に位置付けられた。ただ許容として、「公の文書以外では」と限定した上で、従来の慣習を考慮して、ア列・エ列・オ列の和語の長音は長音符を用いて書き表してもよいとしたのである。これは、本間先生の『点訳のしおり』の立場を受け入れたものであったが、「ユー」については、「現代かなづかい」と同様に語幹であるから、発音にかかわらず「イウ」と書くと明確に規定された。

分かち書きについては、文節分かち書きの原則どおりに、「ようだ」は助動詞として続けることになり、例外からは消えた。自立語内部の切れ続きの判断基準として、

「自立可能な意味の成分」と「文節関係を内包していること」が初めて取り入れられた。しかしながら、内容的には大きな変化は見られなかった。

最も問題となったのは、句読法であった。文末の句点・疑問符・感嘆符については後ろを二マスあけて用いることとし、例外も許容も設けてはいない。読点と中点については、それらを用いて一マスあけることと、それらを用いずに二マスあけか一マスあけにすることとが、並列に位置付けられた。

この編集作業の中では、永井先生の長年の主張と、原本にできるだけ忠実にするという日盲社協の図書館部会の主張が強く打ち出され、本間会長と下澤事務局長の『点訳のしおり』の立場はやや守勢にたっていた。私はこれらの意見を聞きながら、点字表記法の体系化と、将来のコンピュータによる相互変換を意識しながら、編集委員会をまとめる立場をとっていた。

1980(昭和55)年7月、岐阜で開かれた全国点字図書館協議会の「第1回点字指導法確立委員会」で全国統一の点訳テキストを作ることが討議された。その中で、読点と中点を用いるかどうか、ア列・エ列・オ列の和語の長音を仮名にするか長音符にするかで、本間先生と他の委員との間で真っ向から対立して激論がなされた。座が重苦しい雰囲気になったとき、本間先生が「皆さんが賛成するなら私は特に反対しません」と、言われた。この一言で話し合いは一気に進み、8カ月後、『点訳のてびき 入門編』の第1版が発行されたと、当時の事情を藤野克己委員が述懐されている。点字の普及に一生涯を貫いた本間先生らしいエピソードである。

日本点字制定100周年に当たる1990(平成2)年11月、『日本点字表記法 1990年版』が発行された。その中で最も激論となったのは、「する」の切れ続きであった。編集委員会の中で、本間先生も永井先生も、複合動詞とされている動詞の「する」を区切ることには徹底して反対された。意見は完全に二つに分かれ、このままでは11月1日の記念式典に発行が間に合わない状態となった。結局、意見が大きく分かれている場合は変更しないことにしようという結論を得て、記念日までに間にあったのである。その後、本間先生は会長を第4代目の阿佐博会長に譲り、顧問となられた。また、永井先生は学識経験委員を辞して会友となられた。それ以後、お二人とも日点委総会では発言を控えておられ、後輩たちの議論を見守っておられた。本間先生は、『点訳のしおり』を改訂して、点字表記法の統一に努めながら、点字の社会的評価が高まり、普及が進むのを楽しみにしておられた。

本間・永井両先生とも療養を続けられ、自宅で安らかに息を引き取られたが、その

生涯は点字表記法に対する情熱とその普及に努められたものであった。ご冥福をお祈りするとともに、後輩の私どもは両先生からの「贈り物」を大切にしていきたいと痛感している。

本間一夫氏と点字

あ さ ひろし
阿佐 博 (日本点字委員会顧問)

点字の世界で大きな業績を残した人は少なくない。しかしその中で最も顕著な業績をあげた人を一人選ぶとすれば、私は本間一夫氏をおいてほかにはないと思っている。なぜなら、点字はいかにルールを整備しても、実際の読み物がなければ、視覚障害者の利益にも喜びにもつながらないのだが、その両面で業績を残されたのが本間一夫氏だったからである。

1. 点字との出会い

本間氏が点字の存在を知ったのは昭和4年のことで、既に13歳になっていた。その年に、函館盲啞院の初等部に入学したのである。

5月15日、入学の挨拶のために訪れた院長室に、点字毎日が置いてあり、それを見せられたのが、点字に触れた最初だったとのことである。5月9日付の点字毎日だったというから、その号は盲界に情報を提供したばかりでなく、本間氏を点字の世界へ誘う^{いざな}という意義ある使命をも果たしたことになる。

本間氏は幼いころから読書が好きで、「少年倶楽部」のような雑誌や、立川文庫などを読んでもらうのが何よりの楽しみだった。また、毎月2冊ずつ配本される全70巻にも及ぶ「日本児童文庫」なども買ってもらっていたが、これももちろん読んでもらうほかなかった。せっかく毎月買ってもらう「少年倶楽部」が届けられても、読み手が見つかるまではどうすることもできず、新しいインクの匂いを嗅いだり、つるつるの表紙をまさぐったりしながら待たなければならなかったし、「児童文庫」も物語が佳境に入ったところで、「今日はここまで」と言われたりして、自分で読めないことに大きなもどかしさを感じていた。それだけに、自分で書くことができ、自分で読むことのできる文字のあることを知った彼の胸はときめいた。その日から早速点字の勉強を始め、書くことにも、読むことにも、たちまち習熟していった。だがせっかく点字を習得しても、読むべき本がほとんどなかった。教室の片隅に書棚がしつらえられ、そこには若干の点字書が並べられてはいたが、その大半は三療関係の教科書や参考書で、青春の夢を育て、魂を培ってくれるような本はほとんどなかった。せっかく見つけた夏目漱石の『吾輩は猫である』も全6巻となるべきところが2巻で中断されていたり、デュマの『椿姫』は上・中・下の3巻となるべきところ、中巻までしかなかったりした。せっかく興味を持って読み始めたそれらの本が途中までしか読めないということは、読書好きの彼にとっては全くやりきれないことであった。

2. 点字図書館設立への思い

函館盲啞院における学年も進み、そろそろ将来の進路についても考え始めたころ、二人の先輩の講演を聞く機会に恵まれた。一人は岩橋武夫氏であり、他の一人は熊谷鉄太郎氏である。言うまでもなく、岩橋氏は早稲田大学在学中に失明したにもかかわらず、エジンバラ大学に学び、帰国後関西学院大学の教授にまでなった哲学者であり、かつ社会事業家でもある。また、熊谷氏はプロテスタントの盲人牧師として、大きな働きを残した人である。三療の道に進むか、それとも趣味として始めていた琵琶の師匠になるか、そんな将来を思い描いていた彼にとって、この二人の先輩の講演は実に衝撃的であった。このような生き方もあったのかと目覚めた思いだったという。

ちょうどそのころ、好本督よしもとただす氏の著書にも接したのであった。好本氏は内村鑑三の教えを受け、熱心なクリスチャンである。視覚に障害を持つ身にもかかわらず、英国に渡って貿易商を営み、その利益の大半を祖国の視覚障害者の教育と福祉に捧げ、「我が国盲人の父」とも呼ばれる人である。本間氏が手にしたのはおそらく『日英の盲人』

という著書であったと思われるが、その中にイギリスの点字図書館に関する一節があり、「その書棚の全部を連ねると3マイル半（約5，6キロ）にもなる」という記載があった。我が国の点字図書館の状況を思うと、夢のような数字であったが、本間青年の胸には我が国にもそのような点字図書館を設立したいとの思いが生まれるのである。かくして函館盲啞院を卒業するころ、20歳代を迎えた本間青年の人生の方向が定まっていたのであった。

当時点字図書館事業が進んでいたのは、何と言っても英米の両国だったので、彼は点字図書館事業について学ぶには、まず英語を身につけなければならないと思った。そして英語を身につけるには、大学に進学するほかにないと考えて、関西学院を目指すのである。今日と異なり、失明者に門戸を開放していた大学は、関西学院をおいてほかにはなかった。

1935（昭和10）年、函館盲啞院を卒業した彼はその後の1年を受験準備に励み、みごとに関西学院大学専門部英文科への入学を果たすのである。そしてここで3年間の学業を終えて上京して、ひとまず陽光会ホームに勤務する。陽光会ホームとは、「失明女子の母」とも慕われた斎藤百合女史の経営する福祉施設で、ここでは若い失明女子のための学園を営むほかに、点字図書や点字雑誌の出版や盲人用具を取り次ぐ代理店などの事業を行っていた。本間氏は、月刊点字雑誌「点字クラブ」の編集責任者として活躍を始めるのである。彼はその雑誌に毎号エッセーや小論文を発表して、点字による執筆を楽しんだ。だが、このような生活の中にあっても、点字図書館創設の思いはますます募り、準備を進めて、1年半後の1940（昭和15）年11月10日、ついにその日を迎えるのである。

3. 点訳奉仕運動

点字図書館の開設に当たって、当時我が国で出版されていた点字書はすべて購入したものと思われるが、それでも700冊に過ぎなかったし、しかもその大半は三療関係のものだった。何らかの方策を講じない限り、それ以上の発展も、また本間氏自身が希望した、心を育て、魂を養うことのできるような図書を所蔵するのは困難な状況にあった。

だが、切実に道を求める者には幸運が恵まれるものである。それが後藤^{せいこう}静香氏との出会いであった。点字図書館創設に先立ち、彼は知人の^{あまいけのぶよし}雨池信義氏によって後藤静香氏を紹介されるのである。後藤氏は社会教育家で、当時「心の家」という団体を主宰

していたが、視覚障害者についても、あるいは点字に関しても、深い理解と知識を有する人であった。本間氏が点字図書館事業を始めると聞いたとき、我が国には出版された点字書の少ないことが後藤氏の脳裏に浮かんだのではなかっただろうか？ そして点字図書館の発展策として、点訳奉仕という社会運動が発想されたのではなかっただろうか。これは筆者の想像にすぎないが、そのように思われるのである。何事によらずただ論ずるだけでなく、具体化によって解決しようとするのが後藤氏の生き方である。だから点訳奉仕ということが発想されるや、直ちに実行に移された。「心の家本部」において後藤氏自ら黒板の前に立って、点字の講義を始めたのである。

これが我が国における点訳奉仕者養成講座の幕開けであった。1940年11月3日のことだったというから、本間氏の点字図書館開館に先立つこと1週間という、まさに早業であった。

後藤氏には、このような講習会を開けば、必ず人は集まるという確信があったのだろう。それは長い社会教育の体験の中から生まれた確信のように思われる。果たせるかな、この講習会には多くの人が集まり、そこから優秀な点訳奉仕者が続々と生まれることになるのである。

こうして「心の家」で育った点訳奉仕者から、点訳を完成した図書が次々と届けられるようになり、開館して間もない点字図書館の寂しい書架を世界の名著で埋めていった。それに伴って利用者も増加し、それらの点訳書は書架に眠っている暇などなく、郵送により、日本全国の読者のもとを駆け巡ることになるのである。仮に「点字文化」という言葉があるとすれば、日点はまさにその中心となり、全国の視覚障害者の教養の源泉として発展を始めるのである。

4. 点字図書館経営の原型

当時我が国の点字出版事業はなお未発達であった。図書の購入が不可能だとすれば、図書館経営には、自ら図書を製作する以外に方法は考えられない。図書を製作するというのは大変困難な作業であるが、本間氏は「点訳奉仕」という、人の善意によってそれを実現していったのである。もちろん最初点訳奉仕運動を発想したのは後藤氏であったかもしれない。しかしそれは本間氏の点字図書館創設という偉業に促されてのものであった。

今日大きなボランティア活動の一つとして数えられるようになっている「点訳奉仕活動」はこうして、後藤静香と、本間一夫という類いまれな人格の交流によって、生

み出されることになったのである。それがまた点字図書館存在の基盤を確立することにもなり、我が国における点字図書館の原型を形作ることになるのである。1949（昭和24）年、身体障害者福祉法が制定され、点字図書館設立の法的根拠が生まれることになるが、「視覚障害者が利用するものを製作し」と、自館で点字書を製作するという日点の歩みそのものが、法文中にもうたわれることになるのである。

その後昭和30年代、40年代と、点字図書館設立ラッシュの時代を迎え、全国に100館近くの点字図書館が誕生することになるが、日点はそれらにも直接的あるいは間接的に影響をもたらしたものと思われる。かつて好本督は「日本盲人の父」と呼ばれたが、点字図書館事業において、本間一夫氏もまた、そのような呼ばれ方をしても然るべきではないかと筆者は思うのである。

5. 点訳のしおり

現在、点字表記の解説書には幾種類かのものが存在する。その中に本間一夫編著『点訳のしおり』がある。これは点字の表記規則を平易に、具体的に解説したもので、点訳者養成の参考書として、本間氏自らが著したものである。それは「心の家」における講習会にも用いられたであろうが、図書館自体としても点訳者養成を始める必要があり、その参考資料として執筆されたものであった。

我が国の点字表記の変遷を省みると、幾たびかルール作りが行われたことはある。しかし、それらは比較的個別的なものであって、全国的統一を図るものとはならなかった。したがって点字事業に関わるものは、そうした歴史的ルールを参考にしながら、独自のルールを持って仕事に当たっていたのである。そうした意味において、『点訳のしおり』もまた、日点独自の方式の表記法と言わざるを得なかったであろう。しかし、その初版が出されたのは1942（昭和17）年のことであり、当時としては、他に類書がなかったもので、その後行われる点訳奉仕者養成講座などで、全国的にこれが広く用いられた。こうして、本書が点訳奉仕運動発展のために大きく寄与したことを忘れてはならない。

1948（昭和23）年に盲教育の義務制が施行され、文部省で盲学校用の教科書が編集されるようになった。それらの教科書は既存の点字出版所に委託されて出版されたのであるが、それぞれの出版社によって表記に多少の差を生ずることになった。こうしたことが動機となって、点字表記の統一ということが大きな問題となり、盲学校を中心として、「日本点字研究会」（日点研）が発足することになった。1955（昭和30）年

のことである。日点研では、点字表記の規則を定め1959（昭和34）年に『点字文法』として出版するが、それは既に点字図書館などにおいて普及していた『点訳のしおり』の規則と微妙な点において差を生じていた。こうして盲教育界と点字図書館関係との間に表記の微妙な差を生ずることになり、これがまた問題となるのである。その問題を解決するために日点研は発展的に解消し、新たに生まれたのが「日本点字委員会」（日点委）である。『点訳のしおり』が、日点委発足の一つの要因となったとも考えられるのである。

周知のとおり、その後点字表記の規則は日点委が決定し、全国的統一が図られることとなるが、『点訳のしおり』もまた日点委の表記に従って改訂され、今なお広く点訳者の参考資料として使用されているのである。

参考までに今日どのくらいの部数が出ているか、販売元の日点用具課に尋ねてみると、平成13年度9,126部、平成14年度14,908部、平成15年度途中までに7,672部出ているとのことであった。『点訳のしおり』は今なお点訳の世界で大活躍をしているのである。そこに本間氏自身の点訳に対する深い情熱を見る思いがするのである。

6. 点字の活用

本間氏は点字を愛し、それを活用した人でもあった。13歳で函館盲啞院に入学し、点字を習得するや日記をつけ始め、それを生涯続けたという。日記をつけ始めたのは、点字を習得した喜びを表現するものであったとお聞きしたことがあるが、それを継続する強固な意志の持ち主でもあったのだ。いずれにしても70数年にわたってつけられた日記には大きい価値があると思う。その取扱については関係者の意志に任せるほかないが、その話を聞いて筆者のところへ次のような感想を寄せてきた者があった。

「私は障害者の方々との接点がなかったこともありますが、昨年点字の世界に足を踏み入れて、初めて自分が何も知らなかったということに気づきました。本間先生のお話しもお亡くなりになって、いろいろ見たり聞いたりする機会が多くなりました。先生は点字が非常にお好きで、日記をつけていらっしゃったことも聞きました。日記は先生の個人的なものですが、盲界の著名なお方の記録として、それは非常に付加価値の高いものではないでしょうかと考えます。今は直接に本間先生の教えを受けられた方や、お仕事をされた方が多くおいでになることと思いますが、世代が替わっていけば伝説になってしまいます。また晴眼者が、視覚障害者の世界をもっと知るためにも、喜怒哀楽も含めて、先生の日記が公開（出版）されて、その生き方が示されると、ど

んなにすばらしいことだろうと考えました。しかし、日記というのは本当に個人的なものですし、ご家族を含めた関係者にも関わりのあることですし、それを公開するというのは大変なことです。でも、すぐにということは不可能にしても、そのことは本間先生をよくご存じの方々になければできないような気がしてなりません。そんなお話しはないのでしょうか。こんな私の考えは単純で浅はかな勝手なものかもしれませんが。でもそんな考えの人間がいることも申し上げておきたいと思いました。阿佐先生はどうお思いになりますか。」

この送り主は平成14年度の朝日カルチャー点字入門講座受講生の一人である。筆者もこの意見に賛成で、このような考えを持つ人のあることをうれしく思ったものであった。

日記ばかりではない。本間氏が点字で書かれた手紙は膨大なものであったと聞いている。また関西学院在学中、教科書の大半を友人に読んでもらって、自ら点字化した経験もあるというから、本間氏は点字の長所も短所も知り尽くしておられたと思う。

その他一つだけエピソードを記しておくことにしよう。本間氏は盲界関係者の声を残すことに熱心であった。声は晴眼者にとっての写真のようなものだと、よく言っておられた。そしてラジオやテレビから録音したものを中心に、2千本に余るカセットテープを残しておられ、筆者はそれらを見る機会を与えられたが、それらの1本1本にすべて点字のメモが付けられていた。筆者なども必要なカセットテープに点字のメモを付けておきたいと思いながら、つい後回しにしているうちにわからなくなり、そのテープも失ってしまうことがしばしばあった。そんな体験を思うと、本間氏が点字によって身の整理をしておられたことはすばらしいことだったと思えるのである。本間氏は実に点字活用術の名人だったとも言えることができるだろう。

7. 日点委会長として

本間氏は、日点委発足当初から学識経験委員に委嘱され、委員としての働きを続けておられた。特に1978（昭和53）年から1990（平成2）年まで3期にわたって日点委会長を務め、その指導力を発揮されたのであった。

本間氏が日点委会長在任当時の日点委の主な事業に次のようなものがある。

- (1) 『改訂日本点字表記法』の発行
- (2) 1982（昭和57）年から4年間にわたって、「現代仮名遣い」の見直しの審議を行った「国語審議会」への意見書の提出

(3) 『日本点字表記法 1990年版』の発行

(4) 点字制定100周年記念事業

など。

特に点字制定100周年記念事業は、日点委のみならず、日点委が呼びかけ人となつて、日本盲人福祉委員会、日本盲人会連合、日本盲人社会福祉施設協議会、全国盲学校長会を加えて、5団体で「日本点字制定100周年記念事業実行委員会」を組織し、これに点字毎日が協賛という形で加わって、盛大に行われたのであった。特に1990（平成2）年11月1日に開催された、東京虎ノ門の全社協ホールにおける記念式典には600名が参加し、そこで本間氏が記念講演を行ったのであった。また、記念事業の一環として「記念切手」の発行を計画し、それに成功したが、各官庁に対する陳情など、本間氏は日点委会長として奔走されたのであった。

8. おわりに

今日、視覚障害者の情報入手手段も多様化してきてはいるが、なお点字図書館は視覚障害者に読書の喜びを与えるとともに、知的要求の多くの部分にも応えてくれる施設となっている。本間氏の生涯は、その点字図書館の発展に捧げられたものと言っても過言ではないだろう。

1940（昭和15）年創設以来60年余、図書館運営には苦難の時代もあった。特に第二次世界大戦末期にはかけがえのない点訳書を戦火から守るために伝手を求めて茨城県に疎開し、1年後さらに本間氏自身の生まれ故郷、北海道増毛町ましげちょうに再疎開したのである。そうした苦難の中にあっても本間氏は、貸出を中止することなく、疎開先から全国の読者に点字書を送り続けていた。

その情熱に応じて、戦争末期から戦後の混乱期にあっても、多くの人が点訳を続け、完成した点訳書が疎開先まで送り届けられたとのことである。こうした時代を経て今日の日点が存在するのであって、日点支援者の多くは本間氏のこの情熱と常に感謝を忘れないその人柄に動かされたものであったと思われる。そして最期まで本間氏はその支援者たちに点字で礼状を書き続けたのであった。かつて筆者は「多くの手紙を書くのだから、楽で早く書けるタイプライターを使ってはどうですか」と勧めたことがあったが、なぜか本間氏はタイプライターに手を染めようとはしなかった。そして愛用の点字器で点筆を握り続けたのであった。こうして点字を愛し、点字表記規則の整備に努め、点字図書館の発展を願い、視覚障害者に読書の喜びを提供することに専念

しつつ、87歳の生涯を全うされたのであった。

点字の世界においては、ルイ・ブライユや石川倉次などとともに本間一夫もまた忘れてはならない人だと思ふのである。

本間一夫先生の「点字の心」

なおい てつ
直居 鉄 (前・日本点字委員会事務局長)

1

私が点字を習ったのは14歳、昭和15年の4月からである。生来の強度弱視だったが、幼稚園から小学校へ近所の子供たちと一緒に通学していた。しかし、昔の官立東京盲学校の崖下にあった青柳小学校では、「めっかち」とか「ど近眼」などと、からかわれいじめられていた。陸軍の下士官だったという担任の教員からは「おまえは本当に見えないのか。見えなければ見えるようにしてやる。」と、両方の耳の上を拳骨でゴリゴリとこねまわす梅干というおしおきをしばしば受けていた。全盲の兄が東京盲学校に通っていたので、母が後に山梨県立盲学校長になった三上鷹麿先生から紹介されて、麻布の南山小学校の弱視学級（後に視力保存学級となった）4年生に転校した。同じように小学校から転校してきた数人の同級生と共にいじめから解放され、ゆきとどいた指導によって墨字の読み書きが楽しくできるようになった。ところが、卒業して中学校に進学しようとしたが、軍事教練ができないという理由で最も自由な学校と言われた自由学園からも拒否され、やむをえず東京盲学校中等部に入学した。一緒に普通小学校から入学した数人の弱視生と特に希望をしたわけではないが、全盲の先生から点字の指導を受けた。点字毎日などを教材として、毎朝始業前30分ぐらいの厳しい指導であった。しかし、そのお蔭で、まだ墨字を十分に使える弱視生が皆点字の読み書きができるようになった。弱視生はおろか、全盲生に対しても点字の指導がおろそかになっている現在の盲学校の現状を憂うことしきりである。

本稿とは関係がないような個人的なことを臆面もなく書いたが、63年間私の点字と人生の先生であった本間一夫先生の点字に対する思いと、私のような経験を持つ者の思いとは根本的に違うようである。強度の弱視であってもなんとかして墨字の読み書

きをしたいともがきながら、どうしても仕方がなく点字を学習したが、それでも墨字への執着からは抜け出せない。

本間先生は、5歳で失明し、13歳になるまで文字の読み書きが全くできなくて、函館盲啞院に入学して初めて点字の存在を知った。そのときの驚きと強い感動を折に触れて話したり書いたりしておられた。それを聴いたり読んだりした人々は先生の喜びをひしひしと感ずることができた。先生はその点字を自分のためだけのものではなく、点字で読める本のために生涯を捧げたのである。

2

私が点字を覚えたばかりの昭和15年11月に盲学校の近くに本間先生が「日本盲人図書館」を創立した。私は友達と一緒に早速先生の住宅の一部屋の書棚に点字図書が並べてある「日本盲人図書館」に行き、先生に初めてお目にかかった。それ以来63年のお付き合いになった。当時、点字出版されている700冊ほどの点字図書を集めたとのことだが、点字を覚えたばかりの14歳の私が読みたいような本は書棚には見当たらなかった。「どんな本を読みたいのか」と聴かれて思いつくままにいくつかの書名をあげてみた。「すぐにはできないが、点訳してもらってから待っていなさい」と言われた。今でいうリクエストサービスである。知られているように後藤静香先生が提唱し、実践し始めていた点訳奉仕運動があればこそ可能になった点字図書館の存在の始まりであった。どんな本をリクエストしてどれくらい時間がかかって手元に届いたのか記憶は薄れてしまったが、とにかく点訳図書が郵送されてくるのが待ち遠しかった。間もなく本間家と図書館が高田馬場の現在地に移転してからは、当時まだ自転車を乗り回すことができた私は、自分の本だけでなく友達から頼まれた本の運搬もやっていた。それにしても、なかなか点訳ができないので、「君は墨字も読めるし点字も書けるから点訳をしてくれないか」と言われた。私は点字を覚えたものの、学校の教科書は墨字を使っていたので、正確に点訳することができるか自信など全くなかったが、「点字の勉強だと思ってやりなさい」と勧められた。それならばと、私は自分で選んで坪田譲治の『風の中の子供』を点訳し始めた。少し書いて先生に読んでもらったが、どうにか合格したようで、それから太田黒元雄の『音楽夜話』を点訳したことを覚えている。本間先生が点訳された図書に必ず「本書の点訳を感謝して」と1ページほど点訳者の紹介などを書いておられたが、私についてどんなことが書かれてあったのか覚えていない。

いつごろまで続いたのか記憶はさだかではないが、本間先生の提唱で、読者の有志で読書感想文を集めた文集を作ってグループで回し読みをしていた。みんなの点字原稿をそのままのりとじしただけのものであったが、その冒頭に先生が「玉稿を読んで」と感想を書いておられ、どんなことが書いてあるのかが楽しみであった。また、小グループの読者会も開かれ、先生を中心にして楽しい一時をすごしたものだ。点字を通して読者との親しい心の付き合いを深めていくことができた図書館であった。

日本点字図書館は、国によって現在の立派な建物が建てられ、国や東京都、多くの民間企業・団体からの委託や助成などによって事業を実施しているが、総予算の3分の1程度は個人からの寄付金によっている。本間先生は亡くなる直前まで寄付の礼状を点字で書き続けた。墨字で印刷した形式的な書面ではなく、一人一人に点字で書き、職員がかなふりをして出し続けた。私が日点で9年間先生と机に向かい合って仕事をしていたときも、ちょっとでも時間があけば点字板でこつこつと書いていた。タイプライターは使わずに古びた愛用の点字板で1枚1枚、一人一人に話しかけるように書いていた。私なら、覚えてたのワープロで書きたいところだが、先生は「点字でなければ自分の気持は通じないよ」と口癖のように言っていた。

13歳で自ら読み書きできる点字の存在を知り、点字によって点字のために生涯を捧げた本間一夫先生の「点字でなければ自分の心は伝えられない」という「点字の心」を大切にしなければならないと思う。

点字論争の敗北者としての本間一夫先生

とうやま ひらく
当山 啓 (日本点字委員会事務局長)

「当山さん、ボクは点字の論争にほとんど負けてきたのね。でも、それで良かったと思っているんだよ。」

あるとき、本間一夫先生（内部の人間ですが、敬語表現でないとうとうもしっかりしないので、あえてそう書きます）がふと口にした言葉です。あるときがいつで、どんな機会だったかは定かではありません（多分、『日本点字表記法 1990年版』が発

行されて間もないころだったと思います)が、その言葉は今でもありありと記憶に残っています。それを聞いたとき、なんと心広いすごい方か、と改めて感銘を覚えたものです。

それからそれほど日が経っていないころのことと思いますが、本間先生があるボランティア・グループのリーダー(その方も今は故人となってしまわれました)と話しているところに私もたまたま同席していたときのことです。「今度の改訂で、“社会生活する”の“する”を切るようになったのは、ボクは納得がいけないんですよ。“社会生活の”だったら“の”は切らないでしょう」とその方に同意を求めるかのように話しておられました。(改訂のための日点内の会議でもほぼ同様の発言をされていました。)

本間先生が「日本盲人図書館」(現・日本点字図書館)を創立したのは1940(昭和15)年11月10日。そして、その直前に出会った後藤静香先生^{せいこう}の提唱によって点訳奉仕運動を広く社会に呼びかけました。本間一夫編の『点訳のしおり』を刊行したのは、1942(昭和17)年でした(当時は『點譯の栞』)。『日本点字表記法』や『点訳のてびき』はもちろんのこと、『点字文法』(日本点字研究会編)すら存在していなかったころのことです。点訳を志す人の多くは、日点の通信教育を受けた人に限らず、『点訳のしおり』をテキストにしていたと思います。そうした状況から、少なくとも点字図書館を中心とする社会福祉界の点字表記をリードしてきたという自負心は、本間先生の心の中であって当然でしょう。

ほぼ教育界が中心であった日本点字研究会が、社会福祉界と統一する形で発展的に解消し、日本点字委員会が発足したのは1966(昭和41)年で、『日本点字表記法(現代語篇)』が発行されたのは1970(昭和45)年です。それ以後、『点字表記法』の改訂の度に、『点訳のしおり』は改訂されましたが、それ以前にも何回も改訂されているはずです。(私が日点の通信教育を受講していたのは、1966~7年のころですが、新しい『しおり』が送られてきたのにもかかわらず、改訂箇所を確かめもせず古い表記のまま練習文を送ってしまい、添削が戻ってきて、あわてて新しい『しおり』を見直すといったこともありました。)『現代語篇』が発行されてからも、多分それまでの『しおり』の改訂でも、本間先生の意に添わないものもあったと思います。

私が日点に就職したのは1970年4月で、当初は庶務の仕事をしていました。'76年1月から点字出版部(当時)に異動し、日点内の点字に関する会議に参加するようにもなりました。それでわかったのは、最終決定を下すのは本間先生ですが、自分の思

いを何が何でも通そうというのではなく、下澤^{しもざわまさし}仁点字部長（当時）を中心とする点字関係の現場職員の意向を尊重しようとしていたことです。特に、下澤先生の点字に対する論理的な考え方に、一目も二目も置いていたようでした。

'80年代半ばごろだったと思いますが、そのころ、日本盲人福祉研究会（現・視覚障害者支援総合センター）発行の雑誌「視覚障害」の点字版を日点で製版し、一時本間先生自らが校正をしておられたことがありました。その当時、日点ではまだ句点を採用していませんでしたが、「視覚障害」は既に句点を使用していました。それまで本間先生は句点を使用することに反対されていましたが、「いやあ、『視覚障害』の校正をしていたら、すっかり句点に慣らされてしまったよ」とおっしゃって、日点でもあっさり句点を採用するようになったなどということもありました。

本間先生は、日点委創立当初から学識経験委員、'70年度～'77年度は副会長、'78年度～'89年度は会長、'90年度以降は顧問を務めておられます。それでなくとも、日点委での発言の重みは間違いなくあったと思います。それでも、『日本点字表記法』が改訂される度に、自分の好みの点字表記とのずれを感じておられたようです。もちろん、反対意見を表明することは少なからずありましたが、特に『現代語篇』を出そうとしているころには、自分が折れば点字表記はまとまるとお考えになったのではないかと想像します。それが冒頭の「点字論争に負けてきて良かったと思う」との言葉になったのではないのでしょうか。本間先生は、何よりも人とのつながりを大切にする、情の深い愛の人であるのは間違いありません。けれども、こと点字表記に関する限り、自分と異なった考えをすぐに良しとして認めるような柔軟な発想はなかったと思うのです。それが、先に書いたボランティア・グループのリーダーへの、公の場ではない発言に現れていると推測します。また、それこそ点字大好き人間であった本間先生が自分としての点字へのこだわりを捨てるはずはないという意味で、真骨頂だとも思っています。

点字から離れて、本間先生との私の個人的な思い出を書きます。私の就職した'70（昭和45）年は、日点が創立30周年記念事業の一つとして「チャリティ映画会」を始めた年でした。当時、加藤善徳^{よしのり}専務理事の下で庶務係を務めていた私は、本間先生がそれへの協力依頼のために、大手企業などを回るときの手引をする機会がありました。社会福祉法人が社会的にそれほど認知されていなかったころのことで、そのときに応対する企業の担当者の態度はまさに千差万別でした。「わざわざおいでいただかなく

ても、電話でご依頼くださるだけで構わないですよ」と言ってくくださる方もあれば、まるで木で鼻をくくるといふか、また物乞いが来たのかといった態度で、言葉遣いまでぞんざいに応対するような人もいました。後者の場合、私は若かったせいもあり、ムカッとして（協力してもらわなくたって構わない）などと心の中で思ったりもしていたのですが、本間先生は、あくまでも低姿勢でにこやかに話されていました。その日、予定していた企業を回り終わったとき、暑い季節でしたから日点に戻る前に「まあ一休みしようか」とおっしゃって、喫茶店でかき氷などおごってくださいたりしました（本間先生はすこぶる甘い物好きでした）。そのときでも、応対の悪かった人への悪口などは話題にせず、私の手引としての労をねぎらってくださいったものでした。

造り酒屋の家に生まれた本間先生ですが、付き合う程度以上に酒をお飲みになることはほとんどありませんでした。「ボクはねえ、酒には強くて酔っ払ったことはないんだよ」とおっしゃっていました。いつのときだったかははっきりとは覚えていません（確か日点委総会の懇親会の席上だったと思います）が、どういうきっかけでかウイスキーの水割りをお飲みになって「ダルマって変わった名前だけど、おいしいものだねえ」とおっしゃったことがありました（サントリー・オールドを“ダルマ”と通称していることをご存じではなかったようです）。そのとき、それほど量を飲まれてはいなかったと思うのですが、少々酔っておられたような感じでした。本当は、ご自身で信じておられるほど酒に強くはなかったのではないかと思います（飲んべえとしての私の感想）。

本間先生は野球が好きで、大のライオンズファン（西鉄時代からの）であったことはあまりにも有名です。ライオンズが優勝したときは必ず、パートを含めた職員全員にお菓子（ほとんどシュークリームだったと思います）を振る舞ってくださいったものでした。私は子どものころからドラゴンズファン（愛知県生まれのせい？）で、西武と中日が日本シリーズを争い、西武が勝ってシュークリームが配られたときは、複雑な心境でした。おまけに、私は飲んべえで甘いものは好きではありませんから、それを食べたかどうかは記憶にありません。それはさておき、2002年に西武ライオンズがリーグ優勝を果たしたのを喜びになり、'03年にリーグ優勝を逸したのを知らずに逝去されたのは、本間先生にとって幸せだったと言えるかもしれません。

つい最近のようにも、大分以前のようにも思えますが、2002年春ごろ、私は胃ガンのために入院して胃を3分の2ほど切除しました。退院してしばらく経ったころ、本間先生が何度目かの入院をされてお見舞いに行ったとき、「当山さん、会いたかった

よ」といきなり握手してくださいました。心のどこかのほんの片隅に、(本間先生独特の社交辞令かも?)とひねくれた気持ちがないではなかったものの、やはり本間先生の温かさに素直に感激しました。その折りの会話で、「看護師さんたちは本当に親切だねえ。心から感謝しているよ。ボクは、最もナースコールのボタンを押す回数が多い患者だと思うけど、すぐに来てくれてどんな用件でも嫌な顔一つしないですぐに対処してくれるんだ」とおっしゃいました。私も、入院をしたときの看護師さんの単に仕事としての意識だけでやっているとは思えない、まさに白衣の天使と思わざるを得ない親切な対応が心に染みていましたので、大いに意気投合しました。思えば、看護師さんたちへの感謝を書かれた「にっぺんフォーラム」第48号の「会長雑感」が本間先生の絶筆となってしまいました。次号にもっと詳しく書くと書いておられたのに、その号が本間先生追悼号になるなんて!

何度かの入院の都度、担当の医師も驚くほど快復が早くて、その強靱な生命力に驚嘆するしかなく、“不死鳥”という言葉さえ連想しました。最後の入院ののち、退院されてからの自宅療養中にも絶えず日点への募金状況を気にされていたようですが、水も飲めなくなると聞いたときは、さすがに覚悟せざるを得ませんでした。

思い出を書けば切りがありませんから、20年以上も前のものですが、大江健三郎氏が岩波書店の『図書』1971年3月号に書かれた「日本点字図書館からの微光」を引用して終えることにします。

〈本間一夫先生の、じつに晴朗な張りのある声はおよそ忘れがたいものだ。先生の風貌姿勢についてもおなじである。しかし、ぼくが先生の印象を自分の言葉にして具体化しようとして、ついに行きあたるのは、じつは「豪胆」という言葉なのである。ぼくは立川文庫による読書経験もふくめて、自分が少年時から持ちつづけている言葉としてのそれが、よく第三者に、たとえばあの先生の強く晴れやかで、しかも穏和な声の、いわばもっとも気持ちのいい天気のさいの、日の光のような声の印象をそこなうことなく伝えうるものであるかどうかを、疑わしく思う。それでもやはりぼくは、本間一夫先生に、自分が子供の時分からもちつづけてきたイメージの豪傑のような、優しさと豪胆さとを、見出す、と表現したいのである。そのようにしてはじめてぼくは、自分が内部にいだいている感銘の質を提示できるように思うのである。おそらくこの言葉は、ほかならぬ本間先生自身の、いかにも愉快そうな哄笑をまねくように感じられるのであるけれども……(中略)ぼくはそのような本間

先生に、現実的な活動をたゆみなくつづけていられる実践家の面影を見てきた。それはすなわち、豪胆な実践家の面影にほかならない。しかもそれは、ほとんど繊細ともいふべき、細かな配慮に裏うちされた豪胆さである。実践的な指導者として、しかも民衆のがわに、民衆の内部にいる、そのような人間として、具体的な幾人かを、ぼくは名ざしすることができるように思う。そしてそれらの魅力的な人々の、ひとりひとりを、本間先生について、いまぼくのあげたところの独自の資質と同じものがつらぬいているのを、ぼくはくっきりと見出すのである。ぼくはそれらの人々を、かれらの内部に人間的な威厳の種子をやどしている人々とみなしている。) (講談社文芸文庫『鯨の死滅する日』《1992年刊》所収)

長い引用になりましたが、本間先生の人間性はこの文で言い尽くされていると思います。後年のノーベル賞作家をしてこれだけのことを書かした本間先生の偉大さを改めて感じるとともに、点字論争においては敗北者だったかもしれない本間先生は、私などには計り知れない苦勞をしながらも人生の勝利者であり、結局幸せな一生を送ったのではないかと確信しています。もちろん、短所のない人間などいません。本間先生にわがままな面は確かにありましたし、私だって腹を立てたこともあります。しかし、それを補って余りある長所を持った方でした。どんな苦境に立ったときでも常に楽観していた本間先生！ そして、たいていの場合には先生の楽観していたように物事は推移していったものです。大いなる楽天主義は人生に勝利を与えてくれる、と信じさせてくれたのが本間先生でした。

静かな闘志を秘めて旅立たれた永井昌彦氏

かとう としかず
加藤 俊和（日本点字委員会学識経験委員）

永井昌彦先生は、最初の点字受験による大学合格者であり、1955年には当時としては非常に珍しくアメリカ留学された、多くの視覚障害者にとってのあこがれの人であった。言い換えれば、永井先生という高く大きい目標があったからこそ、現在の日本でリーダーとなっておられる、多くの視覚障害者の方々の今がある、といっても過言ではないほどである。

帰国後、京都府立盲学校の教諭となった永井先生は、厳しい中での的確な指導をされていたことで定評のある英語の授業はもとよりとして、様々な活動に熱心に取り組みましたが、特に点字の論客であり障害者雇用の推進者でもあった。

私が点字を勉強し始めたのは1961年の高校2年になったばかりの頃に、京都府立盲学校の理療科の生徒だった人から教わったので、永井先生のごことは以前から存じ上げてはいた。しかし、実際に親しくさせていただいたのは1970年頃からで、同じ京都に住み、お宅とは1キロメートル余りしか離れていないこともあって、日曜日などにしばしば先生のお宅におじゃましては、点字のことや雇用運動のこと、機器用具のことなど、本当にいろいろとお教えいただき議論させていただいた。

特に点字に関しては、永井先生は鳥居篤治郎氏とともに日本点字研究会を支えてこられ、日本点字委員会（日点委）に改組されてからは盲教育界を代表する委員として、

いつも理論と実践に基づいた意見を明確に格調高く述べられておられた。私も日本点字委員会総会や近畿点字研究会によく同行させていただいたが、その道すがら、資料を読んでは、規則と触読の慣れとの関係についてどう考えていくのか、本当によくお話をいただいたものである。そのおかげで、東京や大阪への往復もあつという間に過ぎていき、短く感じられたことを思い出す。

永井先生は、表記についての熱心な研究は言うまでもないが、その延長線上にある「評価と指導」の重要性をずっと強調されておられた。もちろん、一口に「評価」と言っても、様々な面があるが、教育指導の観点からは、児童生徒の到達点や理解の程度を客観的に見ることによって、より適切な点字指導に結びつくということをよくお聞きしていた。私は、当初はボランティアへの指導が中心であったので点字表記の規則しか見えていなかったが、先生の、発達過程を含めた点字触読からのアプローチを熱心にしかも冷静に見つめられていたことにずいぶんと教えられたものである。

ところで、永井先生には、日点委の少し古い？委員によく知られている次のような逸話がある。

日本点字委員会では、表向きの昼間の議論とは別に、「夜の会議」があつて、そこで表記が決まる!?、とよく冗談に言われている。もちろん、これは、昼間の正規の討議が闘わされていることを踏まえた上で、風呂も夕食も終えお酒も適当に入ってから、立場を離れて本音で語り合える場のことを指している。そして、点字に関わる人たちだからこそ、寝るのもそこそこにして熱心な議論が行われるのであり、夜の0時頃までは20人以上、やつと終了する夜中の2時を回る頃にもまだ10人前後はおられることが多いというような「夜の会議」である。この会の醍醐味は、0時頃までは、“夜の議長”がいて、白熱した議論があまり横道に入りすぎないように差配されていることである。つい熱心なあまり、放っておくと議論があつちにいたりこつちにきたりするので、なかなか大変な進行役であり、はっきりとものを言う方が就任？されていることが多いが、たまたま永井先生が“夜の議長”に指名されたことがあつた。そのときも、重要な昼間の会議では、かなり異なるいろいろな意見が出ていて、明日はどのようにまとめるかと案じられるために、夜の議論に委ねられた？観があつた。だが、永井先生は見事にまとめて務めを終えられ、0時前に無事大任を果たされた。

そのあと、みなで大部屋で寝るとき、永井先生は普段はお酒をあまり飲まれないのだが、そのときは、日本酒のワンカップを取り出されたかと思うと、いっきに飲み干してふうっと息をはかれて、ばたんとすぐに寝てしまわれたので、近くの者はみなび

っくりしてぼかんと見守っていたことがあった。もちろん、先生は昼間はいつもきっぱりとした意見を堂々と述べられている論客であり、翌朝も変わりなく明解な意見を述べられていた。しかし、“夜の議長”役は、まじめな永井先生にとっても、気を張られる「仕事」だったのであろうか、あのとときのまわりの人たちの唾然としていた光景が、今でもはっきりと私の脳裏に焼き付いている。

ところで、視覚障害者も晴眼者と同様に大学の入学や雇用が扱われるよう幅広い働きかけと運動を行った文月会、つまり日本盲人福祉研究会は、1961年に視覚障害学生を中心として大阪で産声を上げたときから、長年にわたって視覚障害者の活動の理論的な柱となっていたが、その要となっておられたのが永井先生であった。視覚障害者の大学進学や雇用は、一部を除いて、超えがたいバリアに遮られていたが、ある時は静かな中に熱意を込めて、ある時は激しい怒りをこめて、大学の門戸開放に、職域の拡大に挑んでおられた。私が文月会に参加するようになったのは永井先生のお誘いによってであり様々な活動に目を開かせていただいた。文月会は終わりその役割は若い世代に引き継がれているが、その着実な成果はいましっかりと根付いて、現在の視覚障害者を支えている。

11年前、元名古屋ライトハウス理事長の近藤正秋氏のご尽力によってまとめられた『道ひとすじ——昭和を生きた盲人たち』が発行され、明治・大正期を生き抜いて足跡を残されていた100人の視覚障害者の紹介がされた。永井昌彦先生も当然ながら選ばれて、私が紹介文を書かせていただいた。そのときには、普段は聞きにくいいろいろなことをお伺いする“口実”となったはずであったが、まじめ一方の永井先生に面と向かうと、そんなにつこんだお話を伺うことができなかつたことを、今でも悔やんでいる。

永井昌彦さん——初めて真っ正面から点字受験し合格した人として、指導的な役割を果たしてこられた人として、様々な就労や民主的な運動のリーダーとして、そして点字界を実践に基づいてリードしてきた一人として、視覚障害の分野だけでなく、障害者の道を切り開いた先覚者として、人々の記憶に刻まれていつまでも忘れることはできないであろう。どうぞ永井先生、安らかに、そして後に続く私たちを見守り、お導きください。

永井昌彦先生の印象

みやた のぶなお にっぽん
宮田 信直 (元日本ライトハウス常務理事)

私は、日本ライトハウスに採用されて、はじめて視覚障害の世界を知りました。昭和29年、点字図書館の貸出係になり、利用者の皆さんから寄せられる貸出申し込みのお手紙と、職場の先輩から借りたおおかわらきんご大河原欽吾著の『点字発達史』だけが点字を勉強する教材でした。1年余りを経てようやく点字の読み書きに慣れたころ、ライトハウスが盲学校用の点字教科書を製作する運びとなりました。その一員として点字表記法を習得する必要に迫られて通ったのが日本点字研究会（当時は近畿盲教育研究会）です。京都府立盲学校で、鳥居篤治郎先生やはじめ赤坂一先生、そして永井昌彦先生らの自由闊達な議論の進め方に接して、日本語と点字表記の奥深さ、幅広い知識の必要性を学び、製作現場としての点字表記のあり方を考えることができました。

永井先生とはそのような経緯から親しくご指導をいただきましたが、穏やかではあるものの、一貫して点字を読む側からの厳しいご意見をいただいたのが強く印象に残っています。日本点字研究会が日本点字委員会に衣替えをした後、近畿地区の点字図書館や点字出版所の関係者が勉強会の常設を求めて、近畿点字研究会（略称：近点研）の設立を模索した折は、盲教育研究会の関係者から「屋上屋を重ねるものだ」と厳しくお叱りを受けましたが、永井先生らとの絆を頼りに組織作りを進めることができ、今日に至りました。

平成12年3月、近点研が第150回例会を開催して永井先生からお話を伺う予定でしたが、体調が優れないとのことでお見えにならず、そのままお別れすることになってしまいました。久し振りのご挨拶や今日までのお礼を申し上げる機会を失ったのが今も心残りになっています。

永井昌彦先生のこと

おおやぶ まちこ
大藪 眞知子 (元・日本ライトハウス点字情報技術センター職員)

1

お盆休みも近い8月の夕刻、「日本の点字」編集の小林先生から、突然お電話をいただいた。私ごときに、偉い先生からお電話だなんて、何事がおきたのかと驚いた。なんと「日本の点字」に永井先生のことを書いて欲しいとのご依頼だった。これまた二重の驚きだ。あの、いわば学術資料ともいうべき「日本の点字」に文章を載せるなんて、なんと恐ろしいことか！

「資料的な部分は他の方をお願いしていますので、大藪さんには先生の思い出とか、エピソードとか、そういったことを書いていただきたいんです。」と、いつもの歯切れのいい語り口が電話の向こうから聞こえてくる。それでもまだ、返事を躊躇していると、「だって、〇〇に書いていた…シリーズ、なかなか面白かったじゃないですか。」としっかりおだてられる。肩を張って書かなくてもいいのかな。お悔やみはお通夜にしかうかがえず、7月に催された追悼会にも参加できなかった。御霊前に手を合わせ、不義理をお詫びする気持ちで、お引き受けすることにした。

電話を切ってふと思い出した。その日の昼間、アルバイト先の京都ライトハウスで、中途失明者の点字テキストのことが話題になり、その方面には全く無知な私に、渡辺昭一氏から、「点字読み方教材」という1冊の薄い点字本を見せてもらった。その著者が他ならぬ永井先生だった。それは、「ア イ ナ ニ ワ」から始まり、次が、「ウ フ メ レ タ」というように、縦のラインから横へと進んでいく、先生独自の理念に基づいたテキストだった。

翌々日、職場で何気なくながめていると、偶然こんな一文に出くわした。〈一般教養で点字講座——花園大が4月から開講——〉。私はすっかり失念していた。その講座の最初の講師が永井先生だったのだ。そして、なんと今、私はその大学の点字講座を持たせていただいているのである。すぐ後を、というわけではなかったのだが、忘れていたことは全く不覚だった。先生の開かれた道の上を、何も考えずに歩いていたのだった。

仕事として点字と関わって、今年でちょうど30年になる。ご縁と感謝の気持ちとで、

記憶にある範囲の先生の思い出を語ることによって、節目の年の記念になればと、今は思う次第である。

2

私にとっての永井先生の一番の思い出は、京都府立盲学校で、高等部の3年間英語を教わったことである。出来の悪い生徒だったから、とても厳しい先生、という印象だ。けれど、説明は解りやすく、発音がとても綺麗な先生だった（パーキンス盲学校に留学しておられたから、いわゆる本場仕込みだったのだろう）。卒業してから、英語を読む場面があると、th や l と r の発音が正確だとよく褒められた。先生の綺麗な発音を真似て、読む練習をしたお陰だろう。

また、英作文の授業があり、これはとても楽しみだった。ぎくしゃくした英文しか作れなくても、やる気がある生徒には、どこをどう直せばいいか、個別に丁寧に教えて下さった。これは、大学受験に大いに役立った。

私が大学を受験するに当たって、少しでも沢山英文を読むことで力がつくと言われ、『トム・ソーヤの冒険』の原語版を貸して下さった。点字の原書で、しかも易しいものなど当時は皆無だったから、これはとても有り難かった。おそらくアメリカから持って帰られた先生の蔵書だったのだろう。

大学に入学が決まり、第2外国語をフランス語にすると言ったら、フランス語の点字の一覧表を貸して下さった。結局、語学は墨字を拡大して受けたので、せっかくなご厚意を無駄にしたことになるが、真面目に勉強しようとする生徒には、本当によく面倒をみて下さる先生だった。

ところで、そのころの先生は、とても短気、という印象がある。質問にとんちんかんな答えをしたりすると、「何を言ってるんだ！」と、声を震わせて怒られた。授業時間の後半になると、何度も盲人用腕時計のふたを開けて、時間を気にされた。予定通りに授業を進めようと、時間配分を気にしておられたのだろう。時々、かちっという音と共に、いらだちの小さなため息が聞こえてきたりしたものだ。

3

盲学校の小学部には、<点字>の授業があった。記憶は不確かだが、4年生までは珠算とセットになっていて、そろばんの練習と、メ書きやコタ打ち、五十音の速書きをやらされた。不器用な私にとっては、体操と図工に次ぐ嫌いな科目だった。

5年生になって、永井先生の〈点字〉の授業が始まった。正しい点字の書き方や、分ち書きを教わったという、うっすらとした記憶がある。少なくとも、それまでの〈点字〉の授業とは全く内容を異にするものだったことは確かだ。

大学を卒業して日本ライトハウスに就職し、数年経ったある日、仕事帰りに、職場の超大先輩の疋田泰男氏ひきだやすおに誘われた。職場で何の会合があった時だったか、近点研（近畿点字研究会）だったのか、よく覚えていないが、永井先生と、当時まだ上場企業の研究員だった加藤俊和氏と4人で、京橋の居酒屋で鍋を囲むことになった。たしか1月で、お通しに黒豆が出されたことを鮮明に覚えている。

それまでも何度かちらっとお目にかかってご挨拶くらいはしたこともあったが、ちゃんと向き合ってお話するのは何年ぶりのことだったろう。そのころ、私は京都から通勤していたから、たまたま誘われたのか、あるいは、恩師と対面させてやろうという、疋田氏の配慮だったのかもしれない。

ともかくも、私を除く3人は、私には訳の解らない点字の話を熱心にしておられた。こんな話をしながらお酒を飲んで、何が面白いんだろうと正直思ったものだ。それにしても、あの真面目な先生が、こんなにお酒が強いんだと驚かされたのだった。

その後、近点研をはじめ、各種の会合でお目にかかる機会が幾度もあり、私にとっての怖い先生は、いつのまにかもっと身近な方に感じられるようになっていた。先生が、点字に大変造詣のある方だなどとは、学生時代には全く知らなかった。そして、前述の「点字読み方教材」を執筆されるほど、熱心に点字と関わってこられたことも知らずにいた。

あの小学5年の〈点字〉の授業から、ずっと、細い糸で繋がっていたことを、不思議にも、また嬉しくも思うのである。

4

先生はまた、音楽愛好家でもあった。京都の視覚障害者の音楽愛好家の集まりである「さざなみ会」の発足にも尽力されていた。

私が小学部5年のとき、パーキンス盲学校の留学から帰ってこられたが、その折り、小学部の音楽室で児童と先生方に対しての報告会のようなものが開かれ、スライドなどを見せていただいた。そして、向こうから持ち帰られた楽器を演奏してくださった。たしか、ハーブシコードという楽器で、膝の上に置いて、ぼろんぼろんとなでるように弾く楽器だった。フォスターの曲などを楽しげに演奏されていたのを覚えている。

社会人になってから、何かの席で、ギターを習いたいと漏らしたところ、今どこかの楽器店で習っている生徒がいるから、わかったらお知らせします、とおっしゃって、数日後に電話でその店の電話番号を教えて下さったこともあった。

何年前か前、患われて最初に入院された前後だったと思う。何の用件だったか覚えていないが、先生からお電話があり、けっこういろんなお話しをした。その時、「視覚障害者の雇用問題と点字のことは、自分なりに力を尽くしたと思っています。」とはっきりおっしゃった。「これだけは力を尽くした」とはっきり言えるものを先生の年になっても、私は持ち得ないだろうと、その言葉に深く感動した。それが先生とちゃんとお話しをした最後になってしまった。

お通夜にうかがったとき、奥様は終始涙ぐんでおられた。永年連れ添ったご夫婦が、連れ合いを亡くされてあんなに涙ぐんでおられる姿を、私は他に見たことがない。近点研はほとんどが大阪で開かれるが、いつも奥様は付き添ってこられていた。いつお会いしても知的で物静かな方で、私の名前などもちゃんと覚えていて、声を掛けて下さった。きっと素敵なお夫婦だったんだろうとしみじみ思うのである。

数式等とともに用いられる句読点の用法の 一部変更等について

点字科学記号専門委員会

数式等とともに用いられる句読点の用法について、2002年12月23日の点字科学記号専門委員会で審議され、2003年5月31日の日本点字委員会総会で確認決定されたので、『点字数学記号解説暫定改訂版』の「4. 1 数式指示符号」の「なお」以下の文章（墨字版 p21、点字版 p64）を次のように変更する。

なお、数式の終わりの部分に一般日本語表記の句読点が接するときも、句読点を省略しないことを原則とする。ただし、誤読のおそれがあるなどの場合には句読点を省略して一般日本語表記の省略時の規則に従うが、上記(2)と(3)の2マスあけの規則を優先する。

<解説>

今回の変更は、数式中のコンマやピリオドの用法についてではなく、いわゆる文章記号としての句読点の扱いについての一部変更である。

2000年9月に発行した『点字数学記号暫定改訂版』では、数式の前は1マスあけとしているが、数式の後については、「数式内に関係記号（＝，＞，＜など）が含まれていない場合」には、数式の終わりを1マスあけ、「数式内に関係記号が含まれている場合」と「数式内に必要な1マスあけが含まれている場合」には数式の終わりを2マスあけるとしている。そして、「数式の終わりに書かれている句読点は省略し、一般日本語表記の省略時の規則に従う」とされていた。しかし、文意を明確にするためには、句点の省略はできるだけない方がよく、読点・中点についても、意味の理解を損なわないためには、誤読のおそれがなければ省略しない方がよい場合が多い。特に、試験問題等の文章題等においては、省略すると意味の理解を妨げて重大な誤読につながる可能性もある。そこで、数式の後でも句読点を省略しない方を原則とした。ただし、数式におけるコンマの扱いと混同しないように留意されたい。

以下に、数式後の句読点を書く場合と省略する場合、及び、数式上のコンマを省略する場合と省略しない場合について、化学式も含めて例示したので、参考にしてください。

* 句点を省略する例

化学式後のような、下がり数字と誤読される可能性のある句点（句点としてのピリオドを含む）は省略して、2マスあけに置き換える。

[例]

□ □ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □
 ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □
 ≡ ≡ ≡

（主な成分は CH_4 。不完全燃焼で発生したのは NO 。また、……）

* 読点（読点としてのコンマを含む）または中点をそのまま書く例

次のような「,」は、誤読されない文章上の読点であり、省略せずにそのまま書く。

[例]

□ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ □ ≡ ≡ ≡
 （速度を v_n , 加速度を a_n とする。）
 □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ □ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □
 ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □
 ≡ ≡ ≡

（岩石A, B, C は、それぞれ石灰岩, カコウ岩, ゲンブ岩である。）

* 読点（読点としてのコンマを含む）または中点を省略する例

次の「,」は、右下の添え字と紛らわしい場合や、言葉の部分省略の短い並列であるので省略して、1マスあけまたは2マスあけに置き換える。

[例]

□ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □
 ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ □ ≡ ≡ ≡

（物体の質量を m_1 , 速度を v_1 とする。）

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2003年5月31日と6月1日の両日、大阪市西区江戸堀の日本ライthouse盲人情報文化センターにおいて、第39回総会を開催し、次の事項を協議した。出席者は、阿佐博顧問はじめ、木塚泰弘会長ほか委員20名、事務局員5名、会友5名、オブザーバー等28名、計60名であった。

1. 語の書き表し方に関する解説の要望など

『日本点字表記法 2001年版』を逐条で検討してきた近畿点字研究会から、特殊音の用い方、位取り記数法の適用範囲など10項目について「日本の点字」誌上で解説してほしい等の要望が出され、検討課題となった。

2. 複合名詞の切れ続きについて

複合名詞の切れ続きを、語種と区切り成分・続け成分とで整理しようとした試案が金子昭委員から披露された。

3. 多様化するアルファベット・外国語の書き表し方についての考察

アルファベットを用いて書き表されている会社名・グループ名・商品名などを外文字符と外国語引用符とを用いて合理的に書き分ける書き分け方についての試案が道村静江委員から提案され、検討課題となった。

4. 点字教科書の古文表記について

敬意などを表す補助用言の切れ続きに『日本点字表記法 2001年版』の第6章2節2.の【注意3】を全面的に採用することへの疑問が尾関育三氏から提出された。

5. 英語試験問題の点字表記について

英語の試験問題の点字表記のうち、注記号の用い方と斜線の処理の仕方について、福井哲也氏から『試験問題の点字表記』の該当箇所への修正提案が出され、検討課題となった。

6. 第11回あはき師試験問題の点字表記について

『日本点字表記法 2001年版』の点字表記で初めて実施された第11回あはき師試験問題の点字表記について、自立語内部の切れ続きやつなぎ符の用い方等についての実情報告が岩屋芳夫事務局員からなされた。

編集後記

2003年は、日本点字委員会をはじめ、点字にかかわる多くの人にとって忘れることのできない年になりそうです。日本点字研究会の時代から点字表記の在り方について長くかかわってこられた永井昌彦先生が1月29日に、次いで8月1日には顧問の本間一夫先生が逝去されました。お二方とも日本点字委員会にはかけがえのない存在でした。お二方のご冥福を祈念しつつ、この「日本の点字」第29号は、両先生の点字にかかわる業績をそのお人柄とともに特集としてまとめておくことにしました。

木塚泰弘会長には、まず、日本点字研究会（略称・日点研）から日本点字委員会（略称・日点委）へという歴史的経緯に沿って、本間・永井両先生の点字表記にかかわる功績を論述してもらいました。次いで、日点研の時代から本間先生と手を携えて点字表記の統一と体系化に努めてこられた顧問の阿佐博前会長、日本点字図書館の副館長として本間先生の活動を支えてこられた直居鉄・日点委前事務局長、それに、日点委の委員の中では、本間先生の一番近くで長年点字にかかわる仕事をしてきた当山啓・現事務局長の3人に本間一夫先生についての思いを書いてもらいました。永井昌彦先生については、先生と親交の深かった京都ライトハウスの加藤俊和委員、近畿点字研究会等で永井先生と活動を共にした元日本ライトハウス常務理事の宮田信直さん、それに、永井先生の教え子で、永井先生も講師を務めていた花園大学で点字の指導をしている大藪真知子さんの3人に寄稿の依頼をしました。

日本点字委員会にとって、本間一夫・永井昌彦の両先生は良い意味でのブレーキ役でした。表記法の改訂に当たっては、どちらかというとな保守的な立場から慎重に検討することを主張されていました。改訂の及ぼす影響を心にかけておいででした。永井先生は盲学校での点字指導を、本間先生は点訳ボランティアの活動を念頭に置いておられるようでした。

私は、東京教育大学在学中に澤田^{けいじ}慶治先生の「点字の理論と実際」の講義で点字を覚えました。盲学校での教職を希望していましたので、それだけでは点字の指導をする自信が持たなくて日本点字図書館の通信点訳講座を受講しました。そして、実際に点訳をしながら、本間先生から直接に分かち書きや切れ続きについての指導を受けました。本間先生の懇切なご指導をいただいて、私は盲学校の教壇に立つことができました。

ようなものです。本間先生のお人柄については、「感謝の人」という印象を強く持っています。「点字」とか「読書」といった言葉を除けば、本間先生が一番多く使っている言葉は「感謝」ではないかと私は思っています。

永井昌彦先生と親しく話ができるようになったのは、私が日点委に籍を置くようになってからです。永井先生が、札幌で行われた1974年の全日本盲学校教育研究大会で発表された「触知しやすい字形」から入る中途視覚障害者の入門期の点字触読の指導実践には啓発されました。「ア□□ニワ□□ナワ□□ワニ□……ア□□ニワ□□イワナイ」といった、五十音の体系によらない、安定した形の文字から入る教材づくりをしていたのです。理知的な配慮の行き届いたみごとな教材体系でした。また、1995年秋の鳥居賞の受賞式で、私は永井先生から身に余る祝辞をいただきました。その折「貴方の書かれた『日本の点字』の編集後記をひととおり全部読むことができました」とさりとおっしゃるのです。これには恐縮しました。祝辞一つにそれだけの下準備をしてくださっていることに感激しました。物事に対する永井先生の真摯な姿勢の一端です。忘れることのできない思い出の一つです。

藤野克己委員の執筆になる巻頭の「点字の普及」は、本間先生の畢生の悲願でもあったように思えます。顧問の阿佐前会長の文面にもあるように、読書という形をとっての視覚障害者への点字の普及です。それにしても、識字率などほとんど問題にならない我が国の墨字の普及と考え合わせると、点字を必要としていながら点字の読み書きのできない視覚障害者が、点字を必要としている視覚障害者のうちの7%～9%いるということは憂慮に堪えないことです。点字表記法の普及・徹底を目的の一つに掲げている日点委としては、なおざりにしておけない課題の一つです。藤野委員の提言にあるLサイズの点字による文字の再習得は効果が期待できそうですが、日点委としてどうかかわっていったらよいのでしょうか。

2003年9月21日には、1994年から2002年までの2期盲教育界代表委員を務めた京都府立盲学校のはたあきふみ秦彰文さんが、2004年3月11日には、1983年から1998年まで足かけ4期にわたって盲人社会福祉界代表委員を務めた東京点字出版所理事長の肥後信之さんが逝去されました。お二方の在りし日のご活躍を偲びつつ謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(小林 一弘)

日 本 の 点 字 第29号

2004年 3月25日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169- 東京都新宿区高田馬場1-23-4
8586

日本点字図書館内

電話(03)3209-0671

印刷所 合 同 印 刷 株 式 会 社

〒130- 東京都墨田区業平2-9-13
8621
